KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事 (1903-1939) (下)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): ブロニスワフ・ピウスツキ, 日本滞在, 新聞報道, 伝記資料 キーワード (En): Bronislaw Pilsudski, visits to Japan, news items, biographical material 作成者: 井上, 紘一 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006153

関西外国語大学 研究論集 第92号（2010年９月）
Journal of Inquiry and Research, No.92 (September 2010)

日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事（1903－1939）（下）

井　上　紘　一

要　旨

ブロニスワフ・ピウスツキ（1866－1918）は、北東アジア先住民研究の草分けのひとりである。日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事は12件が確認されている。本稿はそのすべてを忠実に翻刻・収録する。

「記事１～４」は、ピウスツキらが行った1903年の北海道アイヌ調査にかかわり、「記事５～９」は、彼が1906年にヨーロッパへ戻る途上で、日本に７ヵ月余り滞在した際の報道である。

本誌92号に掲載される「記事10～12」はピウスツキ没後の報道。彼が1905年にサハリンを去るとき島に留まることを余儀なくされた、未亡人と遺児をめぐる物語である。

ポーランド人ジャーナリストのヤンタ＝ポウチンスキとピスコルは、ブロニスワフの実弟であるユゼフ・ピウスツキ元帥の指示で、日本領「南樺太」における「遺族」の探索を計画したと報じられている。前者は1934年に遺族と首尾よく会えたが、後者の方は1939年に相次いで出来した政治的・軍事的大事件に妨げられて、計画は実現しなかったらしい。

キーワード：ブロニスワフ・ピウスツキ、日本滞在、新聞報道、伝記資料

解　説

ブロニスワフ・ピウスツキ（Bronislaw Pilsudski, 1866－1918）は、リトワニア生まれの優れた民族学者である。ロシア皇帝暗殺未遂事件に連座してサハリン島へ流刑となり、少壮期の19年をロシア領極東で過ごすことを強いられた。その間、北東アジア先住民研究に従事して、この分野では先駆的な研究成果を残したが、ヨーロッパ帰還後も不遇で、膨大な成果の整理・公刊を果たすことなく、第１次大戦下のパリで客死した。

ピウスツキの学術遺産に新たな光が照射される契機となったのは、1979年春の札幌における「ピウスツキ業績復元評価委員会」[i]の発足である。同委員会は、ポーランドで発見されたピウスツキ採録の録音蝋管を日本に借り出し、最先端の科学技術を駆使して録音音声を再生する事業を進める[ii]とともに、散逸した研究業績を博捜して然るべく評価し、併せてピウスツキの伝記資料も収集した。その成果は1985年に札幌で開かれた第１回ピウスツキ国際シンポジウム[iii]

で報告された。その後、1991年には第2回シンポジウムがサハリンのユジノ・サハリンスク[iv]、第3回は1999年にポーランドのクラクフとザコパネ[v]と、いずれもピウスツキ所縁の町で開催されている。

ピウスツキが残した既刊・未刊の研究業績は、研究の場が国際化する過程で形成されたネットワークのなかで全貌がほぼ究明されて、『ブロニスワフ・ピウスツキ著作集』[vi]としてムトン・デ・グロイター社から刊行中である。ピウスツキが収集した民族資料の図録[vii]も既に上梓され、さらにはピウスツキ研究に特化した逐次刊行物[viii]までも発行されている。かくて「委員会」が掲げた諸課題は、概ね達成されたといえよう。

残された課題は評伝の執筆である。ピウスツキは、数奇な運命に弄ばれて世界の各地を転々と遍歴し、地球一周を「ほぼ」[ix]果たした旅人であった。彼の生涯は、幼少年時代の「リトワニア期」(1866－1885)、逮捕・流刑で中断された短期遊学の「ペテルブルグ期」(1885－1887)、徒刑囚として過ごした「サハリン期（1）」(1887－1899)、博物館勤務の「ウラヂヴォストク期」(1899－1902)、研究者として滞在した「サハリン期（2）」(1902－1906)、欧州帰還を果たして以降の「ヨーロッパ期」(1906－1918）の6時期に区分される。当然至極ながら、彼の全生涯を対象とする評伝を擱筆しえた者はまだいない[x]。そこで、澤田和彦埼玉大学教授と私は2007年、日本学術振興会から科学研究費補助金を得て、かかる評伝を執筆する国際共同研究プロジェクト[xi]に着手する。『ブロニスワフ・ピウスツキ評伝』は、各時期の専門家13名の国際的執筆陣による伝記論文22篇を収録して、2010年3月に上梓された[xii]。

ピウスツキは「サハリン期（2）」に当たる1902年から1906年にかけて、日本を4度訪れたことが判明している[xiii]。初来日は1902年、サハリンのマウカ（真岡、現ホルムスク）からデンビー商会の漁船に便乗して函館に来航、8月6日から30日（露暦[xiv]）まで滞在した[xv]。1903年の第2回来日では、6月20日から9月24日（露暦）にかけて北海道に滞在し、ロシア帝室地理協会がヴァツワフ・シェロシェフスキのために組織した北海道アイヌ調査に、アイヌ語・アイヌ文化の専門家として参加した[xvi]。この折は、彼がロシア語を手解きした樺太（対雁）アイヌの千徳太郎治が日本語通訳として同伴している。第3回は日露戦争直後の1905年9月から11月にかけて、日本軍占領下の南樺太を経て神戸に至る駆け足の旅であった。樺太では東海岸相浜を訪ねて妻のチュフサンマや長男助造[xvii]と会い、妻子を連れての帰国を試みるも、妻の叔父バフンケアイヌの峻拒に遭って断念する。神戸ではニコライ・ラッセルの事務所を手伝った。第4回の来日は1905年12月後半から翌年8月3日まで、7ヵ月余りの長逗留となる。ピウスツキは当初、1906年3月にはヨーロッパへ向け離日してリトワニアへ戻る計画だったようだが[xviii]、東京では6ヵ月、長崎にも1ヵ月弱滞在した。7月30日、大北汽船の「ダコタ号」に乗船して長崎を出発したピウスツキは、神戸を経由して横浜に寄港（8月2日)、翌3日に同港を発ってシアトルへ向かった。

本稿に収録される新聞記事は、12件中9件が「サハリン期（2）」の来日にかかわるが、日本におけるピウスツキの動静が日付を伴って提示されている。具体的には「記事1～4」が第2回の来日、「記事5～9」は第4回の来日に関係する報道である。「記事1」と「記事3～4」は変哲もない乗船者名簿に過ぎぬとはいえ、ピウスツキが「所与の時に所与の場所」にいたことを立証する、伝記情報としては珠玉の歴史資料にほかならない。加えて「記事2」では、シェロシェフスキらが平取で撮影した映写フィルムの内容[xix]にまで言及している。最後の来日では、ピウスツキが既に北東アジア先住民研究者として遇され（「記事5～7」）、真摯なジャパノロジストとしても面目躍如である（「記事8～9」）[xx]。

ピウスツキがパリで客死して半年後の1918年11月11日、亡国ポーランドは悲願の国家再興を果たし、独立運動の立役者であった実弟のユゼフ・ピウスツキが、共和国初代元帥として国家首席に就任する。「記事11」とその種本である能仲文夫著『北蝦夷秘聞』によると、ピウスツキ元帥は「十年前」（即ち1924年）、樺太に在住する「兄の遺族」の探索をパテク初代駐日ポーランド全権公使に命じたが、不首尾に終わったとある。その後10年の空白が何を意味するかは不詳ながら、ヤンタ＝ポウチンスキは1934年1月、南樺太東海岸の白浜においてブロニスワフ・ピウスツキの遺族を「発見」したのである（「記事10～11」）。

「記事12」は、頗る興味深い内容ながら辻褄の合わぬ事柄も散見され、当初は捏造記事ではないかとも疑って収録を躊躇した。しかし、ピスコルという人物を調べていくと、筋金入りの愛国者で辣腕のジャーナリスト、しかも日本で下獄した最初のポーランド人であった事実さえ判明した。事実関係に関する管見は、記事篇の脚注に記したからここでは繰り返さぬが、1939年5月以降相次いで出来したノモンハン事件、独ソ不可侵条約、第2次世界大戦の渦中に身を投じたピスコルには、ブロニスワフの遺族を訪ねて南樺太へ赴く余裕など、到底ありえなかったであろう。

評伝執筆に際しての新聞報道の重要性は、改めて力説しておきたい。日本におけるジャーナリズムの草創期に端なくも際会したピウスツキの訪日は、9件[xxi]の報道記事を産出した。しかしながら、記事の内容を鵜呑みにすることは差し控えねばならない。まず、取材者の（とりわけ外国の固有名詞をめぐる）聴き違え、誤解、勉強不足などが指摘されるが、本稿では必要不可欠の案件に限って脚注を施した。次に、ピウスツキ本人の個人情報に関して、既知の事実とは背馳する記載も散見される。それは「記事10～12」において顕著であるが、殆どは種本に想定される『北蝦夷秘聞』にまで遡及する情報であるから、原則として不問に付した。なお、新聞記事の転載に際しては、「原文のまま」を極力心がけた。

最後に、新聞記事12件のすべてについて、私が第1発見者ではないことを明記しておきたい。本稿を草するに当たり、河野本道、澤田和彦、山岸嵩の3氏からは記事に関する情報を（一部についてはそのプリントコピーまでも）賜った。特に御芳名を記してお礼申し上げる次第であ

る。また、編集中・編集済みの記事稿に目を通して、貴重なコメントを寄せてくださった井上久仁子、澤田和彦、柚木かおりの各氏にも感謝申し上げたい。とはいえ、あらゆる瑕疵への責任は偏に私が個人として負うべきものである。

注

i Committee for Restoration and Assessment of B. Pilsudski's Life and Work. 但し、同委員会の正式名称は、頭文字を連ねた略称の（英語で「サイコロ博打」も意味する）CRAP であった。ある春の宵、北大文学部附属北方文化研究施設の黒田信一郎助教授と井上紘一助手の間で交わされた酒席での「密談」が、その濫觴だったからである。CRAP はやがて文理融合型の国際的学際研究組織へと発展して、1981年以降は、頭に International を冠して ICRAP を名乗った。

ii 1983年７月札幌に到着したピウスツキ蝋管の音声再生作業は、北大応用電気研究所の朝倉利光教授を中心とする工学チームが推進した（朝倉利光、伊福部達（編）『ピウスツキ録音蝋管研究の歩み 昭和58年―昭和61年』北大応用電気研究所1986年刊）。

iii 「ピウスツキ蝋管とアイヌ文化」と銘打つ札幌シンポジウムは9月16－20日、北海道大学国際交流会館で開催された（*Proceedings of the International Symposium on B. Pilsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture.* Sapporo: Hokkaido University. 1985）。

iv サハリン州立郷土誌博物館は10月31日－11月２日、「B. O. ピルスツキー―サハリン諸民族の研究者」と題する国際会議を開催した。ピウスツキ生誕125周年に当たる最終日には、ピウスツキにとって「初の石像」の除幕式が、博物館の前庭で挙行された。会議の報告書は以下の通り。 Сахалинский областной краеведческий музей, *Б.О. Пилсудский — исследователь народов Сахалина* (*Материалы международной конференции. 31 октября – 2 ноября 1991 г. Южно-Сахалинск*). тт. 1-2. Южно-Сахалинск (1992).

v ポーランドで開かれた第３回会議のテーマは「ブロニスワフ・ピウスツキと二葉亭四迷」であった（A.F. Majewicz and T. Wicherkiewicz (eds.), *Bronislaw Pilsudski and Futabatei Shimei —An Excellent Charter in the History of Polish-Japanese Relations: Materials of the Third International Conference on Bronislaw Pilsudski and His Scholarly Heritage* [*Linguistic and Oriental Studies from Poznań*. Monograph Supplement 7]. Wydawnictwo Naukowe Uniwersytetu im. Adama Mickiewicza w Poznaniu. 2001）。古都クラクフから保養地ザコパネへ会場を移し、その後のタトラ山地へのポストコングレス・エクスカーションも含めて、８月29日から９月７日までの長丁場であった。

vi Alfred F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski.* Vols.1-2 (1998), Vol.

3 (2004) [*Trends in Linguistics*, Documentation 15—1, 2, 3]. Berlin and New York: Mouton de Gruyter. 3巻までが既刊、間もなく第4巻が上梓され、全7巻を予定している。

vii SPb－アイヌプロジェクト調査団（編）『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』（日露英3言語併記版）東京：草風館（1998); ヴラヂスラフ M.ラティシェフ、井上紘一（編）『樺太アイヌの民具』（日露英3言語併記版）札幌：北海道出版企画センター（2002)。

viii 代表的事例として2誌を掲げる。(1) サハリン州立郷土誌博物館附置ブロニスワフ・ピウスツキ遺産研究所の発行する『研究所通報』 *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского.* № 1-13. Южно-Сахалинск — 1998年に1号が刊行され、2009年発行の13号までが既刊；(2) 井上紘一が1999年に創刊した欧文誌 *Pilsudskiana de Sapporo* [Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University (1999-2002); Saitama: Faculty of Liberal Arts, Saitama University (2008-2009)] — 6号までが既刊（但し、3号以降は澤田和彦教授との共編、第4号は未刊)。

ix ピウスツキの地球一周を阻んだのは、三国分割下のポーランドを走るオーストリアとロシアの国境線であった。1906年にヨーロッパ帰還を果たしたものの、ロシア帝国に併合されていたリトワニアへの帰郷は、遂に叶わなかった（拙稿「ブロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」45-46頁)。

x とはいえ、昨年上梓されたラティシェフ氏によるピウスツキ伝『サハリンにおけるブロニスワフ・ピウスツキの生活：伝記試論』は、「サハリン期（2)」までを叙述する作品であるが、最初の本格的な評伝である（Владислав М. Латышев, *Сахалинская жизнь Бронислава Пилсудского. Пролегомены к биографии.* Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство. 2008)。

xi 2007-2009年度基盤研究（B)「ブロニスワフ・ピウスツキの評伝執筆のための実証的研究」(研究代表者：澤田和彦 埼玉大学教授)。

xii Kazuhiko Sawada and Kōichi Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Pilsudski* [Preprint]. Vols. 1-2. Saitama: Faculty of Liberal Arts, Saitama University (March 2010).

xiii 沢田和彦「ブロニスワフ・ピウスツキ日本暦」145頁。「日本暦」は、澤田教授がピウスツキの日本滞在を精査された結果を取りまとめた年譜であるが、記載事項の各々に出典が提示され、参考文献も完備している点が高く評価される。なお、「日本暦」は増補・改訂版が、ロシア語版・英語版とともに、澤田教授の科研報告書に再録され（澤田和彦『幕末・明治・大正期の日本とロシアの文化交流に関する実証的研究』さいたま：埼玉大学教養学部 2007年刊)、また邦語版と英語版は、われわれのホームページ Pilsudskiana de Sapporo (URL: http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/inoue/TOPF.htm）でも公開されている。以下の記

載は概ね「日本暦」に拠っている。

xiv ロシア帝国で採用されていたユリウス暦のこと、ロシア革命後の1918年まで行われた。露暦を西暦へ換算するには、19世紀で12日、20世紀では13日を、露暦年の日付に加算されたい。

xv ピウスツキはこの函館行を、マウカからコルサコフへ赴くための緊急避難措置として選択した。友人のシュテルンベルグへ宛てた手紙に、この旅は「無断・無賃（зайцем）」の渡航であったと記しているから、密航に近いものであったろう。したがって、新聞種になるようなことは周到に避けたのではなかろうか。

xvi 拙稿「B. ピウスツキと北海道：1903年のアイヌ調査を追跡する」。

xvii サハリン滞在中のピウスツキは1903年頃、アイヌ女性チュフサンマ（別名シンキンチョウも伝えられている）とアイヌ風（プリ）の結婚式を挙げ、１男１女をもうけた。「記事10～12」で紹介されるように、長男が木村助造、長女は木村（結婚後は大谷姓）キヨであるが、キヨはこの時まだ母の胎内にいた。

xviii ピウスツキは1906年２月８日、『東京朝日新聞』の記者に「本月中（ほんげつちう）［即ち２月中］を日本（にほん）の研究（けんきう）に費（つひや）し、一度（いち）故郷（どこきやう）の波蘭（ポーランド）に歸（かえ）り、夫（それ）より再（ふた、）び樺太（かばふと）に渡（わた）りて引續（ひきつゞ）き人種學（じんしゆがく）上の研究（けんきう）に從（したが）ふ」予定と語っている（「記事７」）。

xix シェロシェフスキは自らの旅行記『毛深い人たちの間で』（1927）のなかで、彼らは映画撮影機を携えており、彼自身が撮影を担当したと記すものの、撮影対象についての記載は頗る乏しい。この時の記録フィルムは目下行方不明であるから、「土人（とじん）の熊送（くまおく）り、舞踊（まいおどり）の類（るゐ）を活動寫眞（くわつどうしやしん）に撮影（さつえい）し」たという記載（「記事２」）は頗る貴重である。

xx ここまでの記事は、『研究論集』91号に収録されている。

xxi 当該期間（1903－1939年）に報道されたピウスツキ関係記事は、収録した12件以外にもありうるであろう。関連情報をお持ちの方がおられたら、御一報いただけると幸甚である。

II. ピウスツキの遺族に関する記事

記事10.『樺太日日新聞』第7937号（1934［昭和９］年１月９日付）

波蘭陸相の義妹｛アイヌ｝を尋ねて/ 波蘭新聞記者來島

陸相の内命により白濱に實情を探る/ アレキサンダー・ヤンタ氏

我が樺太が露領/ 當、[sic] 時、露國はこ/ の島の開拓を囚人に依つて爲さん/ と企て、今の大泊町楠溪町（コルサ/ コフ）に監獄を置き、本國より重罪/ 犯人をこの島に護送したのであつ/ た。その頃露國政府の命を受けて/ 囚人の教化訓育と云ふ大任を帯び/ て本島に渡つたポーランド人の理/ 學士があつた。その名はプリード/ スキー氏[1] である。プ氏は其他囚徒/ の訓育と共に土人アイヌの教育/ にも努め、一八九六年（明治廿七年）[2]/ 春頃から一九〇四年頃迄居たが、日/ 露戦争の眞唯中に祖國獨立のため/ 歸國した。在島當時ポ氏[sic] は白濱土人/ 部落の酋長の娘シンキンチヨウ[3] と/ 結婚同棲して二児を儲けていたが、/ 祖國復興の大任を重んじ、妻と二児/ を樺太に殘して專心努力した甲斐/ あって、其後［ポーランドは］獨立した[4]、プ氏の兄は/（ピルスキー氏）[5] 大統領に當選し/ たが、プ氏はパリーで客死した。ピ/

1）ブロニスワフ・ピウスツキ。「プリードスキー」は Pilsudski が不正確に表記された形と推察され、初出は能仲文夫著『北蝦夷秘聞：樺太アイヌの足跡』（1933）のようである。能仲はその直後に括弧書きで「アイヌはプズスキーと呼んでゐる」と注記している（同書２頁）。　以下では、「ポ氏」と記された１例を除き「プ氏」と略記されている。因みにヤンタ＝ポウチンスキ（脚注７参照）は、日本人がピウスツキを “Pronisraw Pridski” と呼んでいた、と記録している（Janta-Polciński, *Ziemia jest okrągła*. Str. 281）。

2）ここに併記される西暦年と明治年は齟齬をきたしている。もし西暦が正しければ明治29年であり、明治27年は1894年に当たる。

3）チュフサンマという名も伝えられている。バフンケ「酋長」の「娘」とあるが、翌10日付の詳報では「姪」に訂正されている。なお、ヤンタ＝ポウチンスキはこの女性を、「バフンケ首長の娘（córka naczelnika Bafunke）」の「シンキンチョ（Sinkincio）」と記録する（*op. cit.,* str. 282）が、一方ではその名をまた「キムラともシラカワともジュサウンマとも（i Kimura, i Sirakawa i Dziusaumma）」聞いたが、どれが本名か決め難かったとも記している（*op. cit.,* str. 286）。

4）ポーランド共和国の独立は1918年11月11日、ブロニスワフの死から半年後に成就する。

5）ユゼフ・ピウスツキ（Józef Klemens Piłsudski, 1867－1935）。「ピ氏」と略記。ブロニスワフ・ピウスツキの年子の「実弟」。1918年に国家の再建を果たしたポーランドの軍人・政治家。その際、ユゼフは国家首席に就任し、その後も大統領となることはなかった。

氏は現在同國の陸軍大臣の要職に/ 在る。謎を殘して他界した實弟の/ 妻子を探すべく手を盡したピ氏は/ 其後［、］本社々員たりし能仲文夫氏の/ 著作に成る北蝦夷秘聞[6]に依つて［、］實/ 弟プ氏の愛妻とその子等が樺太に/ 生在［sic］してゐる事を知り［、］直ちにポー/ ランド電報通信社東洋特派員アレ/ キサンダー、ヤンタ氏[7]に依頼［、］一切/ の事情を知らんとしたのである。/

その命を受けたヤンタ氏は去る四/ 日［、］突然來島して豊原町花屋本店に/ 滞在［、］殘留ポーランド人等に依つて/ その眞相を突き止むべく努めてゐ/ たが、愈確證を得たものの如く［、］八/ 日午前八時十分豊原發新問行きの/ 列車の人となり［、］中央情報社長であ/ る菱沼右一氏[8]と共に目的地白濱に/ 向つた、ヤンタ氏は同地に二泊の/ 後［、］十日には一先ず豊原に引返す豫/ 定であるが［、］生在するシンキがプ氏/ の妻であつた事が確實となれば［、］ピ/ 氏の下へ連れて行くとまで話は進/ んでゐるので［、］このエキゾチツクな/ 物語りは［、］昨春紙上を賑やかした伊/ 太利大使の娘松島事件と共に［、］今後/ 如何に展開して行くか？その成行/ きは興味を以て注目されてゐる（/ 寫眞は白濱に向ふア氏と菱沼氏［、］豊/ 原驛頭にて）

6）大泊の北進堂が1933年に刊行した『北蝦夷秘聞：樺太アイヌの足跡』。能仲文夫（1907－？）は、樺太日日新聞記者、外地評論社社長兼主筆を経て、拓殖省・南洋庁・朝鮮台湾総督府・満鉄・南洋開発で嘱託を務めた。戦後は星光化学工業社長。このほかに『血に彩られた北樺太：現状と資源』（中央情報社1935）、『赤道を背にして：南洋紀行』（復刻版 東京：南洋群島協会1990）などの著書がある。

7）正しくはアレクサンデル・ヤンタ＝ポウチンスキ（Aleksander Janta-Połczyński, 1908－1974）。ポーランド人のジャーナリスト・作家。記事では「ア氏」と略記。ヤンタ＝ポウチンスキはブロニスワフの遺族を尋ねる旅の記録を、『地球は丸い』（1936）と題する旅行記の第９部に収めている（Janta-Połczyński, “U Polaków na Sachalinie,” str. 241－298）。

8）菱沼右一（1883－1944）。『報知新聞』『国民新聞』の記者・社会部長・理事を経て、『樺太日日新聞』の主筆となる。1931年、東京で「中央情報社」を創立して社長を務めた。なお、文筆活動としては、葛西猛千代・西鶴定嘉との共著書『樺太の地名』（1930）もある。

記事11.『樺太日日新聞』第7938号（1934［昭和9］年1月10日付）

愛し夫よ何處？

三十年の戀を祕め/ 老メノコは泣く

濱茄子の丘に結ばれた若き日の戀

軈て惠まるゝ歡び

風凍るオホツクの海邊に咲いたピリカメノコ[9]と異國人[10]との戀は相濱ウタリの憧れの花だつた。内淵川の水嵩が増/ して、單調な砂濱の丘にも軈て濱茄子が眞紅に咲いた。其頃の二人は一番幸福だつた。.... 明治三十七年[11]、東亜の/ 風雲は急を告げて日露の國交は斷絶した。平和だつた白濱ウタリの生活にも何かしら慌しいものと、重苦しい/ 空気が流れて行く.... それは、オホツクの海も悲しげに吠ゆる大雪の夜だつた。祖國の爲め、兄のため愛し妻と、/ 二人の子を遺して此の地を去らねばならない男の苦しい胸を、充分知りながらもシンキは何故かしら腹が立つた。呪はしい戰争よ、—/ —それから二十何年かゞ經過した。シンキは今盲目となつて侘しい生活を送つて居るが、其見えない瞳の奥には今尚、冬の日に別れた/ 夫の悲しい顔がありありと見えるのだ。奇しき縁に結ばれた若い日の懐かしい思ひ出が、涙と共に湧き出て來る。シンキは未だに別［れ］た夫/ が歸つて來るものと信じてゐる。然しその夫は祖國の獨立運動に狂奔の途、夢寝にも忘れることの出來ない遠いサガレンに遺して來た/ 妻子の身を想ひながら祖國の土と化した。盲目の老メノコは泣けど、内淵の砂丘に咲く濱茄子の實は熟れても、この涙に綴られた悲し/ い物語りは盡きようともしない..... だが然し、シンキの涙が涸れて、軈て樺太にも新春の歡びが訪れる頃、シンキと其二人の子にも輝/ かしい光が映えようとして居る。

9）バフンケの姪、シンキンチョウ（脚注３参照）。能仲の記すところによると、当時の彼女は「まだ十八になつたばかりの小娘」（『北蝦夷秘聞』７頁）であった。「ピリカ「.」メノコ」はアイヌ語で「美しい娘」を意味する。樺太の日本人社会では当時、このアイヌ語が格別の説明なしに通用していたらしい。

10）プロニスワフ・ビウスツキ。前日の夕刊に載った速報は「プリードスキー」、本記事では「プブスキー」と表記されるが、いずれも不正確である（脚注13も参照）。以下では「プ氏」と略記される。

11）1904年。この年の２月10日に日露戦争が勃発する。

ピリカメノコに寄せる/ 若き教授の戀情

「情けの酋長」の微笑

物語りは今から三十數年前の明治/ 二十九年[12]頃に遡らねばならない。/ 其頃の樺太は流刑徒の島だつた…/ 北國の春は遅い。四月だと言ふの/ に亜庭湾の一帯には未だ厚氷が浮/ 游して、肌寒い風が吹いて居る。能/ 登呂岬を迂回した一隻の軍艦は、/ 多數の囚徒を乗せて今コルサコフ/ （楠溪町）を指して進路をとつて/ 居る。艦内では頭髪を半刈りにした/ 物凄い形相の囚人が、何か判らぬ/ ことをわめいて居た。其都度看守/ の鞭がピユーピユー鳴つた。凄惨な/ 光景である。かうした荒くれ看守/ 連の中に交つて先生と呼ばれて居/ る若い紳士があつた。一体この若/ い紳士は何者であらう。當時露國/ 政府が出獄囚徒訓育の爲め樺太へ/ 派遣したモスコー大學教授ポーラ/ ンド人、プブスキー[sic]氏[13]であつた。/ コルサコフに上陸したプブスキー/ 教授は之等の囚徒教化の爲め更に/ 九月下旬コルサコフを發して、殖/ 民部落訪問の旅に上つた。斯くて/ プ氏が全島を跋渉して相濱の土人/ 部落に入つたのは五月初旬であつ/ た。當時の相濱には樺太東海岸アイ/ ヌの總元締とまで言はれた木村バ/ フンケ[14]が住んでいた。プ氏はバフ/ ンケ酋長の好意に依り、こゝに暫/ らく逗留することになつた。酋長/ には一人の美しい姪があつた。名/ をシンキンチヨウと呼んだ。まだ/ 十八になつたばかりの乙女であつ/ たが目の涼しい可愛い娘だつた。/ ピリカメノコとして相濱の若者達/ から騒がれたものである。軈てプ/ ブスキー教授とシンキの間に越え/ てはならない異國人同志の戀の花/ が咲いた。教授はシンキの爲めな/ ら一生この相濱に止まつてもいゝ/ と思つた。そして自分の使命で/ ある囚人の訓育と。この哀れな亡び/ 行く民族の教化に努力しよう/ と決心した。シンキもプブスキー/ 氏の眞摯な態度、物に動じぬ男ら/ しい魂にどんどん引き付けられ/ て行つた。狭い部落には二人の仲/ が知れ渡つた。美しいメノコを異/ 國人に取られた――さう思ふとプ/ 氏を怨んだ。然し「親切なロスカ/ イ」で通つている彼に對して怨み/ を口にするような者は一人もな/ かつた。叔父のバフンケも濱茄子/ の丘で戀を語る二人の姿を何遍も/ 見受けた。そんな時はバフンケ酋長/ は見て見ぬ振をして居た。寧ろ頼/ しい青年に相倚る愛し我が姪の幸/ 福を祈るのだつた。二人は何もか/ も知つている情の酋長――バフ

12）1896年。ブロニスワフはこの年、北樺太のルィコヴォから徒刑囚身分の儘樺太南部へ派遣され、アイヌの人たちと初めて接触する。但し、その使命は「出獄囚徒の訓育」でなく、気象観測所の設営であった。

13）能仲の伝える「プズスキー」（脚注１参照）の誤記であろう。なお、ブロニスワフはここで「モスコー大學教授」と紹介され、前日の速報でも「理學士」と謳われているものの、ペテルブルグ大学法学部１年在学中に逮捕・流刑となったから、高等教育を修了して学士号を取得した事実はない。

14）バフンケ（アイヌ）。日本名が木村愛吉。

ン/ ケの取計らひで[,] 秋も漸く深くなつ/ た九月下旬、全部落民が集まつて/ 盛大な結婚式を擧げた[15]。花婿は三/ 十才、シンキは十八才であつた[16]。

哀れ、愛を捨てゝ/ 祖國の獨立運動へ

悲劇の第一頁はこゝに.....

プブスキー氏とシンキの間は其/ 處に異人種を超越した力強い愛に/ 結ばれて[,] 朗らかな家庭が營まれた。/ 二人の間には間もなく一男一女が/ 儲けられた。プ氏の土人教化事業/ もシンキの内助の功に依つて一段/ と業績が擧がつた。このまゝ平和/ な生活が續いて行つたら今日のよ/ うな悲劇は生まれなかつたかも知れ/ ぬ。..... 明治三十七年[17]、日露の國交/ が斷絶した。平和なプブスキー一/ 家も何か不吉な空気に襲はれるよ/ うな豫感がしてならなかつた。果/ してプ氏の兄から毎日に亘つて秘/ 密電報が齎されて、プ氏の兄ピル/ スツキー氏[18]は祖國愛に燃ゆる勇敢/ な闘士であり、革命家であつた。/ 日露開戰を機會に多年虐げられた/ 帝政の羈絆を脱して[,] 往年のポーラ/ ンド國を獨立せんと企てたのであ/ る。秘密電報とは[,] この獨立運動に/ 參加せしむべく弟のプブスキー/ 氏の蹶起を促さんとしたものであ/ る。プ氏は今や躊躇すべき秋[19]でな/ いと考へた。然し最愛の妻、そ/ して愛しい二人の子を思ふとプ氏/ の決心も鈍り勝ちだつた。..... 秘密/ 電報はひつきりなしに配達される[。] / プ氏は愈 最後の決斷をせねばな/ らぬ時が來た。それは「旅 順 陥落/ 」の報を手にしたからである。—/ —さうだ俺は露國の爲め死んでは/ ならぬ。俺は祖國ポーランドの再/ 興に努力せねばならぬ。それは責/ 任だ。——プ氏の心には俄然祖國愛/ が燃えさかつた。破壊された愛、/ 悲しき別れの發端はかうした「呪/ はしい戰争」の爲めだつた。橇は/ 吹雪を衝いて遠ざかつて行つた。/ 放心したシンキが兩児を抱いて夫/ の心を追ふた。涙の第一日、悲劇/ の第一頁、可憐なシンキの胸は裂/ けようとした。

15）文脈を追う限り結婚式は1896年「九月」の出来事とも解されるが、これを裏付ける資料は皆無であるだけでなく、時期的にも余りに早すぎる。長男助造の誕生を斟酌すると、このアイヌ風の結婚式は1903年の「九月」に挙行されたものと推定される。ブロニスワフは同年９月24日（露暦）、北海道アイヌの調査を終えて、コルサコフ（大泊）に戻っている。

16）もしも結婚式が1903年９月だとすると、花婿は36歳、花嫁は19歳の筈である。

17）1904年。日露国交断絶は２月４日のことである。

18）ユゼフ・ピウスツキ。前日夕刊所載の速報では「ピルスキー」とあるが、本記事では初出で「ピルスツキー」とかなり正確な形に近づくものの、それ以降は「ピルツスキー」という表現が繰り返されている。ユゼフは「兄」ではなく、ブロニスワフの年子の「実弟」。

19）本記事の著者は「秋」を「とき」と読ませるつもりと忖度される。因みに、これは能仲文夫の『北蝦夷秘聞』に頻見される用語法である。ここからも、同書は著者の依拠した種本であった事実が端なくも窺える。例えば該当箇所は、「プ氏は今は躊躇すべき秋ではないと考へた」（同書13頁）となっている。

夫の死も知らず/ 歸宅を信ず

獨立の犧牲になつたプ氏

歸國したプブスキー氏は兄ピルツ/ スキー[sic]氏と共に祖國の獨立運動に/ 狂奔した、然し帝政露國の看視は/ 日露戰爭後更に嚴重を極め/ 容易に実績が擧がらなかつた。或時は國/ 外に逃れ、或る時はひそかに入國/ して同志の糾合に努め、血みどろ/ の苦闘が十年近くも續けられた。/ 生死の境を彷徨する危険な身であ/ れば、サガレンに遺して來たシン/ キや愛児のことは忘れるともなく/ 忘れられるのであつた。軈て欧洲/ 大戰後ピルツスキー一派の策謀/ が効を奏し、亡国ポーランドは輝/ かしい前途を約束して再び獨立國/ として世界地圖に新たに描き出さ/ れた。國都ワルソーには破れんば/ かりの歡聲が嵐の如く擧がつた。/ 第一次の大統領[20]として輝かしい新/ 興國を荷なつて起つたのは、云うま/ でもない革命運動の第一人者ピル/ ツスキー氏であつた。ピ氏はこの/ 大命を荷ない始めて祖國の新たな/ る姿を凝視した時、其所に貴い犧/ 牲者の一人である愛弟プブスキー/ 氏の面影を追想するのだつた。プ/ 氏は國事に奔走の渦中、獨立の成/ 果を見ず、サガレンに遺して來た/ 妻と愛児の名を呼びながら巴里で/ 客死して居た。然し哀れな盲目/ のシンキ（其後夫の身を想ふて泣き/ 暮らした爲か盲目となつて居た）/ はそんなことは知る由もなかつた。/ 「今に歸つて來る」と別れる時から/ 言ひ遺した言葉を未だに忘れず、/ 之を固く信じて三十餘年待ち侘て/ 居るのだ。

義妹等を發見して/ ピ陸相の歡喜

隠れたる菱沼氏の努力

巴里で客死したプブスキー氏は隠/ れたる植物學者であつた。獨立後/ プブスキー氏の遺書中から世界 植物學稀/ に見る貴重な研究が遺されて居る/ のを發見された大統領ピルツスキ/ ー氏は、薄倖な弟の爲めこの書[21]を/ 公にした。この遺書を整理中、弟/ が樺太アイヌと結婚し而も二人の/ 子まで儲けたことを知つた、弟/ の爲、この遺された妻甥姪の幸福/ を祈つてやることは兄の責任である/ と痛感した。今から十年前、日本駐在/ ポーランド公使[22]に命じて其後の調/ 査をなさしめたが（一等書記官某/ 氏が樺太廳の案内で調査した）發/ 見するに至らなかつた、其後本社/ 記者能仲文夫氏が『北蝦夷秘聞』[23] / を公にするに當り、端なくも

20）初代大統領はナルトヴィチ（Gabriel Narutowicz）であった（脚注18参照）。

21）植物学書の公刊については未詳。

22）能仲は、その人物を「五年前駐日公使であり、現にモスコーに駐在しているパテク氏」（『北蝦夷秘聞』16頁）と記している。Stanisław Patek（1866－1945）は再建ポーランド共和国の初代駐日特命全権公使（在任1921－1926年）。1924年には在住ポーランド人を訪ねて樺太へ赴いた（Janta-Połczynski, str. 265）。

23）能仲著『北蝦夷秘聞』（1933）。

シンキ/ が生存してゐる事實が判明した。/ ピ氏は現在では大統領を退き陸軍/ 大臣の要職にあるが[,] 日本公使館の/ 報告に依つてその後の状況を知り[,] / 今回 改めて調査方を命じたのであ/ る、かくて昨日の夕刊所報の如く/ ヤンタ氏の來島となり[,] 事情調査の/ 結果[,] シンキが今尚プブスキー氏/ の寫眞を肌身離さず所持して居る/ ことや、其當時から存命してゐる/ アイヌ等の話を綜合して確實だと/ 言ふことが判明したので[,]」 ヤンタ氏/ は雀躍して詳細をポーランドに向/ け打電した、かくてシンキ親子に/ も惠まれる春が訪れよう、尚この/ 發見に就ては[,] 中央情報社長菱沼右/ 一氏の後援が與つて力がある[24]（寫/ 眞は当時のプブスキー氏[25]と[,]」 孫を抱/ くシンキ[26]）

写真１「當時のプブスキー氏」

写真２「孫を抱くシンキ」

24）ヤンタ＝ポウチンスキの旅行記『地球は丸い』（1936）によると、著者は樺太へ向かう船中で菱沼右一と遭遇した（Janta-Polczyński, str. 252）。旅の目的を聞いた菱沼はその後、著者を白浜へ案内して、未亡人や遺児（娘キヨ）とも引き合わせている（*op. cit.*, str. 284－286）。

25）「写真１」参照。1903年、函館の井田写真館で撮影されたポートレイト。ポーランドのクラクフとザコパネで開催の第３回国際ビウスツキ・シンポジウム「ブロニスワフ・ビウスツキと二葉亭四迷」（1999年８月）で配布された肖像写真を転載。「シンキが…肌身離さず所持し」ていたのは、間違いなくこの写真であろう。

26）「写真２」参照。能仲文夫『北蝦夷秘聞』１頁より転載。

記事12.『小樽新聞』第15517号（1939［昭和14］年6月15日付）

国際愛卅年ぶり/ アイヌの老婆に“春”

ピルスヅスキー將軍/ 實弟の遺族を引取る[27]

［眞岡發］國際紛糾/ の渦中にある欧洲ポ/ ーランド國獨立最初の大統領ピルスヅス/ キー將軍[28]の實弟〔、〕故ブ/ リートスキー〔sic〕氏[29]の遺/ 族が〔、〕今帝国北端の版/ 圖樺太に現存してを/ るといふので、故實/ 弟の遺族を本國ポー/ ランドに呼び寄せ〔、〕そ/ の血統を立てようと/ したピルスヅスキー/ 氏が〔、〕今回來朝在京中/ のポルスカ・ズブロ/ イナ[30]・クリエル・ポ/ ズナンスキ[31]〔・〕プロスト/ ・ズ・モスワ〔sic〕[32]・ポーラ/ ンド放送協會特派員/ アクサンダー〔sic〕・ピス/ ユール〔sic〕氏[33]に遺族引取/ 方を依頼、ピスユール氏が近々樺太へ遺族をたづねて來島するといふ報が傳へられ一般の興味を呼んで/ ゐる。ブリートスキー氏の遺族と目されるアイ

27）ピウスツキ元帥は脚注5に記した通り昭和10（1935）年に没し、またチュフサンマも翌11（1936）年1月に亡くなっているから、当該記事の「見出し」が記すような事態は、昭和14（1939）年には起こりえなかった筈である。とはいえ、ポーランド政府中枢の誰かがピウスツキ元帥の没後、その意を体して（あるいはそれに反して）ブロニスワフの遺族をポーランドへ呼び寄せることを発案、遺族との折衝役としてピスコル特派員（脚注33参照）に白羽の矢が立った可能性は排除されない。樺太の真岡（現ホルムスク）にて「ピスコル情報を知る人物」を取材した『小樽新聞』の記者は、能仲文夫著『北蝦夷秘聞』を「不正確に」参照しつつ、この頗る興味深い記事を執筆したものと推察される。

28）ユゼフ・ピウスツキ。ブロニスワフの年子の「実弟」（脚注5参照）。ユゼフは、厳密を期すならば「将軍」ではなくて、新生ポーランド共和国の初代「元帥（marszałek）」である。

29）元帥の「実兄」であるブロニスワフ・ピウスツキ。「ブリートスキー」は、能仲の伝えた「プリードスキー」（脚注1参照）の誤記であろう。

30）ワルシャワの日刊紙 *Polska Zbrojna*（武装ポーランド――発行期間1921－1939年。但し、第2次大戦後の1945－1950年に復刊、その後40年に及ぶ、*Żołnierz Wolności*（自由の戦士）を名乗った改称期を経て、1991年には旧名に復した。現在は週刊誌として継続）。

31）ポズナンの日刊紙 *Kurier Poznański*（ポズナン急報――発行期間は1872－1939年）。

32）正しくは『プロスト・ズ・モストゥ』（*Prosto z mostu* ＝「橋の上から真っすぐに」と直訳される慣用副詞句であるが「直言」と意訳しておきたい）。ワルシャワの日刊紙 *ABC* 日曜版の付録として発行された *ABC Literacko-Artystyczne*（1931－1934）を前身とする文芸週刊誌、1935年に独立して『直言』を名乗る。同誌も上記2紙と同様、第2次世界大戦勃発の1939年に廃刊となる。

33）正しくはアレクサンデル・ピスコル（Aleksander Piskor, 1910－1972）。パシュキェヴィチ（Mieczysław Paszkiewicz）が執筆した『ポーランド伝記事典』所載の伝記記事によると、ピスコルは1938年12月、『直言』誌（とKurier Warszawski [ワルシャワ急報]）の特派員として米国へ旅立ち、ワシントンとニューヨークでの取材を終えて、1939年8月に来日したとされている（Paszkiewicz, “Piskor Aleksander,” str. 554）。

しかるに、6月15日付の本記事冒頭でピスコルは「今回来朝在京中」と紹介されるだけでなく、彼が『直言』誌27号（7月2日付）に寄せた最初の日本レポートは冒頭で「東京、5月」と、執筆の月名を明示し、また「ある春の夕べに」サンフランシスコから横浜に入港した「鎌倉丸」で来日した、とも記している（Piskor, “Pierwsze wrażenia,” str. 2-3）。しかも付載写真には満開の桜も認められるから、来日の時期は4月上旬にまで遡りえよう。なお、ピスコルのワルシャワ出発を報じた『直言』誌1939年1号は、彼が前年の「クリスマス直前」に8カ月の予定で出

ヌ婦人は本名木村シンキ[34]（六十歳を越えた年配）と［,］其遺/ 児木村某[35]で［,］樺太に現存することは早くから傳へられ、しかも東海岸榮濱白濱部落に居住してゐること/ も判明してゐるので[36]［,］この報が現實となつて現はれ、樺太アイヌ部落の一隅に三十余年間埋もれてゐたア/ イヌ婦人とその子が［,］今を時めくポーランドの老將軍のもとに引きとられ、一躍名もなき老婆とアイヌ/ 青年が世界ニユース界に躍り出る様になるかどうか、この話題は一層の興味を呼

国、ソ連が通過ヴィザの発給を拒否したため米国経由で日本へ向かった、と記している（*Anonym*, "Wyjazd Al. Piskora do Japonii," str. 12）。しかしながら、ピスコルが『直言』誌に寄稿した日本記事（7月2日付27号，8月13日付33号，8月27日付35号所収）には、ブロニスワフ・ピウスツキの遺族に関する情報が全く見出せない。

本記事が『小樽新聞』に掲載されてから2ヶ月半が過ぎた1939年9月1日、ドイツ軍がポーランドへ電撃侵攻して第2次世界大戦が勃発した。駐日ポーランド大使館（1937年10月に公使館から昇格）は翌2日、ロメル（Tadeusz Romer）大使のイニシアティヴで「大使館通信班」（別称「極東ポーランド通信班」――バシュキェヴィチの伝記記事（str. 554）はPolskie Biuro Prasowe na Dalekim Wschodzieと伝えている）を創設、通信班長には「ポーランド電信電話局」特派員のアレクサンデル・ピスコルが就任する。彼は翌40年1月発刊のポーランド語週刊『広報（Biuletyn）』、また41年1月に創刊された月刊広報誌（英語版 *Poland Today* と日本語版『今日のポーランド』）の編集長も務めて、大使館報道官として手広く広報活動を展開した。「大使館通信班」は、大使館が閉鎖された41年10月23日に活動を停止する（パワシュ＝ルトコフスカ、ロメル共著『日本・ポーランド関係史』193-211頁）。『広報』の最終号（1941年10月19日付）にはピスコル編集長が自ら執筆した「訣別の辞」が掲載された（前掲書212頁）。その後も日本に残留したピスコルは、41年12月（日米開戦の直後）に「反日・反独宣伝」の容疑で予防検束され、半年ほど収監されたのち、42年7月30日に日英交換船「龍田丸」で離日した（前掲書213頁；Piskor, "Kolonja polska w Japonji," str. 2）。

以上を踏まえるならば、たとえピスコルが「遺族呼び寄せ」の付託を受けていたとしても、まことに遺憾ながら彼が樺太へ赴くことはなかった、と断ぜざるをえない。

34）その名はチュフサンマとも、またシンキンチョウとも伝えられている（脚注3参照）。「シンキ」は後者の愛称形。

35）木村助造（1903－1971）。ヤンタ＝ボウチンスキはこの人物を（1934年1月当時）32歳、"Kimura Skeizo"と記録している（Janta-Połczyński, str. 286, 295）。

36）ヤンタ＝ボウチンスキは1934年1月8日（「記事10」）、菱沼右一の案内で樺太東海岸の白浜を訪ねて未亡人や娘キヨと会見し、翌9日単独で赴いた白浦では、駆けつけた遺児の助造にも会えた（Janta-Połczyński, str. 284-286, 294）。

ところで彼は白浜を去るとき、アイヌたちからピウスツキ元帥のために、一振りのアイヌ刀を託されていた（*op. cit.*, str. 295）から、元帥は刀とともに、樺太の遺族に関する報告も受けたと忖度される。なお、当時の『樺太日日新聞』報道によると、ヤンタ＝ボウチンスキは1934年1月10日、遺族発見のニュースを「ポーランドへ向け打電」している（「記事10」「記事11」参照）。

これに先立つ1933年2月、菱沼の義弟に当たる能仲文夫は『北蝦夷秘聞』を上梓、その第1章「盲目の老メノコは泣く」ではシンキンチョウとの面談や、彼女とブロニスワフの悲恋譚が虚実交々綴られていた（同書1-18頁）。因みに、ヤンタ＝ボウチンスキはこの章の内容を、菱沼の翻訳で聴き取り、日本人の間で膾炙するラブストーリーとして、自らの旅行記に収録している（Janta-Połczyński, str. 281-282）。

んで來た（寫眞は令/ 弟を捜す老將軍[37]）

巷間傳へられた處によるとブリー/ トスキーと樺太アイヌ婦人との間/ には［、］次の様な國境を越えたロマン/ スと哀別のエピソードがある

写真 3「令弟を捜す老將軍」

ブリートスキーは人類學を研究/ する理學士で明治二十九年まで/ モスコーのソ聯［sic］大學に教授とし/ て奉職して居たが［、］多数の人類が/ 居住する樺太において自己の希/ 求する學術研究のため渡樺を決/ 意し［、］當時の露國義勇艦隊に便乗/ し樺太に渡つた（一説には政治/ 犯として露官憲に捕はれシベリ/ アに流刑されたが［、］後脱走して樺/ 太へ漂着したとも云はれる）［。］そ/ し［て］最初の上陸地大泊から相濱/ 附近にあって露國監獄の教誨師/ として勤める傍ら人類學の研究/ に没頭してゐたが［、］當時同地にあ/ つた同族の酋長たる日本名木村/ バフンケ[38]と親交をつゞけて居る/ うち［、］その娘である美しきシンキと［sic］/（當時十八歳）と國境を越えて/ の戀愛に陥り［、］卅歳の學者ブリー/ トスキーは遂に結婚を許された［。］/ その後十年間は平和な同棲生活/ を營み二人の男子［sic］を儲けたが、/ かくする内祖國ポーランドには/ 大革命運動が起こり［、］兄であるピル/ スヅスキー將軍は革命の第一線/ に躍り立つた、そしてブリート/ スキーの歸國をしきりに促した/ ので［、］兄の運動に參加することゝ/ なつた［。］ブリートスキーは［、］樺太に/ 求めた妻子を引き連れて歸國せ/ んとしたが［、］父のバフンケがこれ/ を許さず［、］遂に再會を約して涙の/ 哀別をした、ブリートスキー/ は祖國愛に燃えつゝ直ちに歸國［、］/ 時の英雄たる兄の下に大活躍/ をなし［、］遂に革命に成功してポーラ/ ンドの獨立が成つた、その後も/ ブリートスキーは兄を助け［、］東奔/ 西走すること十年に及んだが［、］遂/ に異國にある妻子との再會の機/ 會がなくパリで客死した[39]

といふのである、時を経、年を過/ ぎた昭和三年春頃［、］故弟の遺族が遠/ き異國樺太の地に在ることを忘れ/ なかつた實兄のピルスヅスキー將/ 軍はその血統を求めて［、］時の東京ポ/ ーランド公使館書記生をして木村/ 一家を探すべく樺太に渡り［、］樺太廳/ とも協力して遺族を求め［しめ］たが［、］その/ 時は遂に判明しなかつた、越えて/ 昭和十年に至り遂にピルスヅスキー

37）「写真３」参照。同一の肖像写真をWacław Jędrzejewicz, *Józef Piłsudski 1867－1935*. Londyn: Polska Fundacja Kulturalna（1982）の口絵より転載した。

38）相浜の「酋長」バフンケ（アイヌ）、日本名は木村愛吉。「シンキ」の叔父で養父でもある。

39）ポイントを落として別記されたこの１段落は、能仲著『北蝦夷秘聞』第１章の要約である。

將/ 軍が求めつゝあつた木村母子が樺/ 太に實在することが判明、その遺/ 児は東京に赴きポーランド公使館/ まで訪れたのであつたが、眞偽不明/ でそのまゝとなつた、この忘れか/ けられた物語りが今再び世に現れ/ たのである

註＝遺児たる木村某は毎年白濱/ から西海岸多蘭泊の漁場へ出稼/ ぎに來てをり、その母たるシン/ キは現在盲目の老婆となつてゐ/ るといふ

参考文献

能仲文夫「盲目の老メノコは泣く」、能仲文夫『北蝦夷秘聞：樺太アイヌの足跡』 1-18頁所収 大泊：北進堂（1933); 復刻版『樺太アイヌの足跡』東京：第一書房（1983）

パワシュ＝ルトコフスカ、エヴァ、アンジェイ・ロメル共著 柴理子訳『日本・ポーランド関係史』東京：彩流社（2009); 原著 Ewa Pałasz-Rutkowska i Andrzej T. Romer, *Historia stosunków Polsko-Japońskich 1904-1945*. Warszawa: Wydawnictwo Bellona (1996)

Anonym, "Wyjazd Al. Piskora do Japonii［Al.ピスコル日本へ出発］," *Prosto z mostu* nr. 1: 12 (January 1, 1939)

Janta-Polczyński, "U Polaków na Sachalinie［サハリンのポーランド人歴訪］," in: A. Janta-Polczyński, *Ziemia jest okrągla*［地球は丸い］. Str. 241-298. Warszawa: Rój (1936) ── [a selected English translation by A.F. Majewicz] A. Janta-Polczyński, "Shirahama and Shiraura," in: A.F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Piłsudski*. Vol. 3, Appendix 3. Pp. 731-744. Berlin and New York: Mouton de Gruyter (1998)

Paszkiewicz, M., "Piskor Aleksander (1910－1972)," *Polski Słownik Biograficzny*［ポーランド伝記事典］. Tom XXVI/3, zeszyt 110, str. 554-555. Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk-Łódź: Polska Akademia Nauk (1981)

Piskor, A., "Pierwsze wrażenia［初印象記］," *Prosto z mostu* nr. 27: 2-3. Warszawa (July 2, 1939)

Piskor, A., "Wenus w kimonie［和服のヴィーナス］," *Prosto z mostu* nr. 33: 4-5. Warszawa (August 13, 1939)

Piskor, A., "Dai Nippon banzaj!［大日本万歳］," *Prosto z mostu* nr. 35: 4-5. Warszawa (August 27, 1939)

Piskor, A., "Kolonja polska w Japonji［日本におけるポーランド・コロニー］," *Dziennik Polski* nr. 907: 2. Londyn (1943)

（いのうえ・こういち　国際言語学部教授）